

ワニグチソウとナルコユリの自然雑種, ワニグチナルコユリ

大 場 達 之

On Natural Hybrid between *Polygonatum involucreatum* and *P. falcatum*.

Tatsuyuki OHBA

Polygonatum falcatum-like plant was observed in Yokohama. Its specimen is distinguished from *P. falcatum* by the presence of bracts. It was considered to be a hybrid between *P. involucreatum* and *P. falcatum*.

神奈川県のアマドコロ属の植物は、ミヤマナルコユリ、ヤマアマドコロ、オオナルコユリ、ナルコユリ、ワニグチソウの5種類が知られていたが、中尾真弓さんが、多摩丘陵の一角である横浜市緑区新治町でナルコユリとワニグチソウの雑種と考えられるものを発見された。全形はややナルコユリに似ているが、葉は短く、花序に大きな苞葉があり、ほかのアマドコロ属の植物からはっきりと区別できる。一応ワニグチナルコユリの名前を与えて記録しておく。

ワニグチナルコユリ (新称) ワニグチソウ×ナルコユリ

Polygonatum involucreatum × *P. falcatum*

根茎は白色で太さ1~1.2cmほどの円柱状で、ワニグチソウの根茎の形状に似てそれより太く短い。ミヤマナルコユリやナルコユリのような連球状にはならない。茎は丸く隆条はなく、下部は帯紅紫色、上部は緑色で細かい紫点が多く、汚れた緑色に見える。高さ80~100cmで下部直立、上部は斜上。葉は8~15枚。長楕円形で、最も大きい葉の長さは76~137cm、幅21~36cm。主脈と2本の側脈が顕著で3行脈に見える。葉の色はやや青みがかった緑色でナルコユリに近い。下面脈上は平滑。花は5月下旬。花序は茎の下部から2~3節めから上に、3~9節にわたって着く。花序の柄は長さ16~30mmで、先に輪生状に2~4枚の苞が開

出してつく。苞は狭卵形で1脈があって反曲する、先端は尖る。苞の最大のもは長さ14~22mm、幅5~8mm。花は一つの花序に2~4個着き、長さ5~7mmの花柄がある。花筒は長さ17mm内外、太さ3~4mm、基部から $\frac{1}{4}$ あたりの部分がかもとも太く、先端部で急に細まり、裂片は開出し、先端の縁に細毛がある。全体に帯緑白色で、脈と裂片の先は帯緑色。花柱は無毛で花筒より超出、雄しべは花筒の上部 $\frac{2}{3}$ のところに着き、花糸は長さ4mm内外で細かい突起がある。葯は長さ2.5mm。果実はまだ観察していない。

和名はワニグチソウとナルコユリの間種という意味であるが、花部は鱗口というよりは嬰珞といたい感じがある。

日本には花序に苞を有するアマドコロ属の種類として、ワニグチソウのほかにミドリヨウラク、ウスギワニグチソウ、コウライワニグチソウ、コワニグチソウなどがあるが、ここに報告したものがその何れとも異なることは明らかで、ワニグチソウを片親とする自然雑種と考えるのが最も穏当であろう。苞の存在、花の形などから、この片親がワニグチソウであることは間違いないとおもわれるが、もう一方の親はナルコユリともオオナルコユリとも考えられる。新治町にはナルコユリは普通であるが、オオナルコユリはまだ見えない。花糸に細突起があるのと、葉の下面が平滑なの

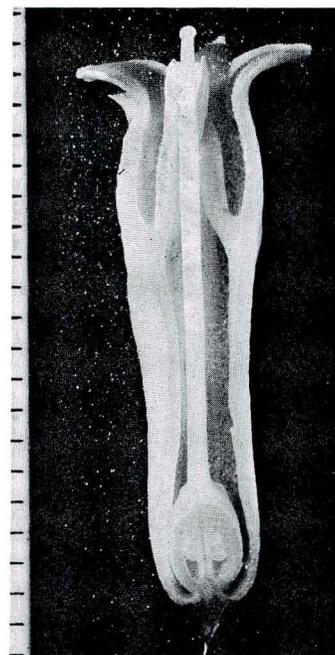


図2 ワニグチナルコユリの花の縦断

図1 ワニグチナルコユリ (横浜市緑区新治町, 1986. 6. 7. 中尾真弓採集)

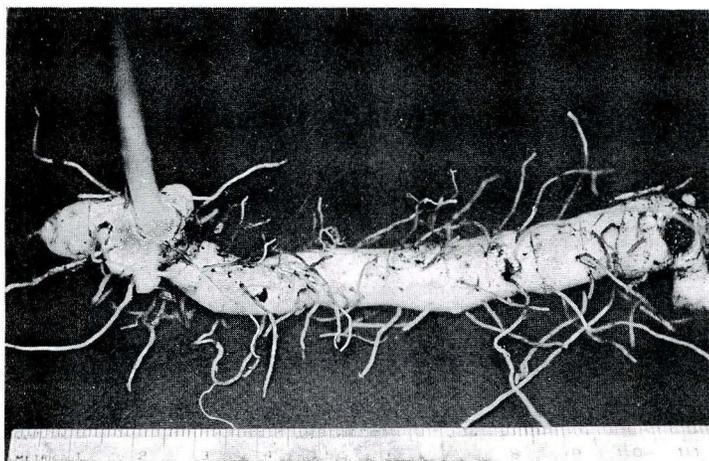


図3 ワニグチナルコユリの根茎



図4 苞片数の多いワニグチソウ，蕾が開花に至らないものが多い。(緑区新治町，1985. 5. 26)

はワニグチソウに由来するものと考えておき，花筒の長さ，地下茎の形状，花糸や葯の長さなどから，一方の親はナルコユリと推定しておく。この関係はさらに染色体などの面からも追求してみたい。なおこの植物の採集された新治町にはアマドコロ属の植物としてワニグチソウ，ナルコユリ，ヤマアマドコロ，ミヤマナルコユリが産出し，ワニグチソウは苞が4～7枚もあるイブキワニグチソウ型のものがあるが，これはワニグチソウの多数の標本をみていると，区別すべきほどのものではないと考えられる。なおこの苞片の多いワニグチソウは花つきが悪く，蕾が途中で萎縮して開花に至らないものが多い。

ここで一つ気がかりなのは，多摩丘陵の北部でタカオワニグチソウという苞を有する種類が記録されていることである。これはコウライワニグチソウの変種とされているが，大井(1973)，佐竹(1978)などのタカオワニグチソウの写真を見ると，植物体の感じがいかにもミヤマナルコユリに似ていることが気にかかる。国立科学博物館には，林弥栄氏が1963年5月に，南高尾の峯の薬師で採った標本がタカオワニグチソウ

のカバーにおさめられている，それには採集者の手でワニグチミヤマナルコユリの名が付けてある。これはその形態がワニグチソウとミヤマナルコユリの間で，その雑種ではないかという採集者の推測を表したものであろう。国立科学博物館に收藏されている4枚のタカオワニグチソウの標本をみると，やはりタカオワニグチソウはワニグチソウとミヤマナルコユリの雑種であるといえそうである。厳密には雑種を造ってみて証明すべき問題であらう。

同じ多摩丘陵にワニグチソウの雑種が2つも見つかるというのも面白いが，その多摩丘陵の自然が開発で急速に破壊され，新治町の自然も風前の灯であるという。多摩丘陵の自然はもうこれ以上破壊すべきではないと考える。

文 献

- 大井次三郎 1965 日本植物誌. 改訂新版, 写真12.
佐竹義輔 1891 ユリ科, 佐竹義輔ほか編 日本の野生植物. 草本, 1: pl. 42, fi.: 2.

(神奈川県立博物館)